



# ふれあいの道

## 「生命」を育てるこどもへの責任 城南にもヌートリアが生息していた！

先週の金曜日、低学年の下校時のことです。「校長先生、城南でこんな動物がつかまりました。」という寺島先生の声に、驚いて廊下に出ると、ポリのごみ箱の中には、茶色の毛皮でしっぽが長く足に水かきのある、五十センチくらいのおおきなねずみのような動物が入っていました。丸々として、円らな目で不安そうに見上げています。しかしこの動物を捕まえるとき、寺島先生の靴に噛みつき、二年生の先生方も協力して捕まえました。子どもたちに向かかっていかななくてよかったと思います。この頃、子どもたちの中に「目の光る小さなカバがいる」という目撃情報あったのは、これだったのです。

この動物は、南米原産の「ヌートリア」でした。ヌートリアは、丈夫で育てやすく、戦争中に軍隊の防寒用毛皮のために飼育されたそうです。戦後、多く野外に放され、野生化しました。現在も岡山県ではかなり生息しているようですが、この城南にも住んでいたのです。ヌートリアは、「侵略的外来種」として、畑の野菜を食べたり、巣穴を掘るので田んぼをこわしたり、日本の生態系を破壊させる動物に指定されています。外来生物法によって、飼ってはいけない生物です。早速岡崎市動物総合センター（アニモ）に連絡すると、すぐに引き取りに来てくださいました。「占部川のどこかに巣穴があるのでしよう」というお話でした。

以前にも子どもたちが「カメをつかまえた」といって学校に持ってきたことがあります。しかしこのカメは、ミシシッピアカミミガメという種類で、これも飼ってはいけない動物でした。ヌートリアも、ミシシッピアカミミガメも、もともとは人間が自分たちのために持ち込み、それが野生化して困っているのです。世の中はペットブーム。どんな動物を育てる時も、「生命への責任を最後まで持つこと」を、ヌートリアの悲しそうな目が語ってくれた気がしました。



## 校庭の花 エゴノキ

運動場の南、ふれあいの道の途中に、白い花をたくさんつけた木があります。エゴノキです。エゴノキという名前から「自分勝手な木」なのかなあとありますが、この木の実には、サポニンという有毒物質があり、口に入れると「えぐい」（苦い）から、名前が付けられたそうです。かわいらしい花が咲くので、庭によく植えられます。種はかたい殻に包まれているので、昔はお手玉の中に入れて音を楽しんだそうです。花ことばは、「壮大」。花のイメージとは若干違います。

